



人生の最期に関わる ケアマインドのすすめ

～教会ができること～

本セミナーの目的

- ① 人生の最期に関わるとはどういうことか理解する
- ② 教会ができることを理解し、具体的な動きを考える

講師：中澤 信幸（大野キリスト教会 牧師）



1 老いの中で起こること

身体的な変化と必要な支援

- 体の衰え → 生活の見直し
- 病気・入院
→ 治療、身の回り・手続きの支援
- 認知機能低下 → 意思決定の代行
- 最期（命の終わり） → 葬儀・事後処理

※老いは「赤ちゃんに戻っていくプロセス」とも言えます



1 老いの中で起こること

内面的な苦しみ（三重の苦しみ）

- 身体的苦痛

- 精神的苦痛

無力感、将来への不安、自己肯定感の低下

- 霊的苦痛（スピリチュアル・ペイン）

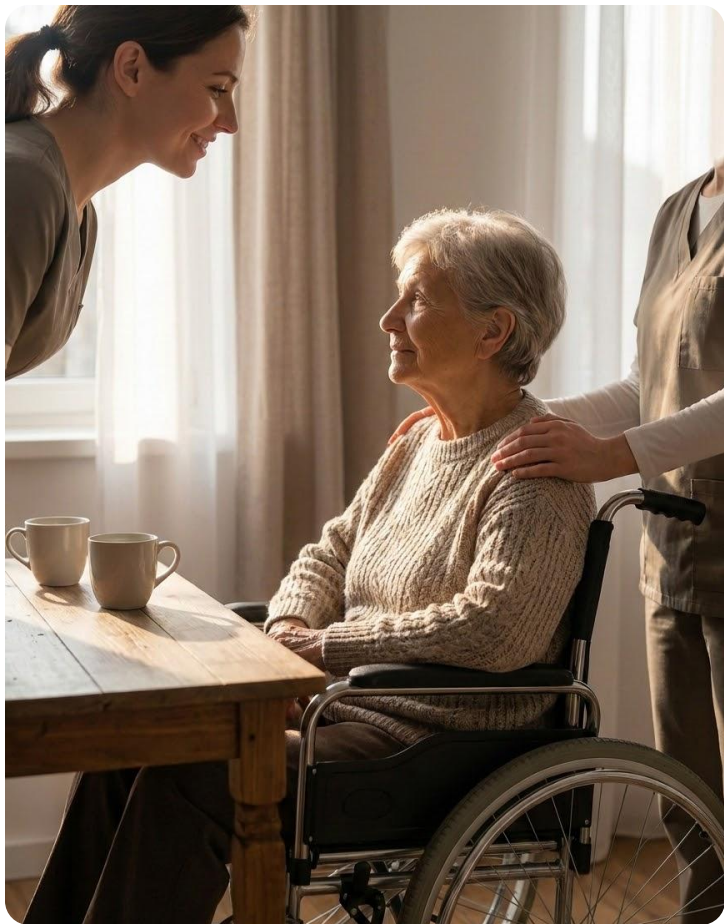
「なぜ私だけ？」 「生きる意味は？」

という答えのない問い

転倒による脳出血

Nさん(89歳)





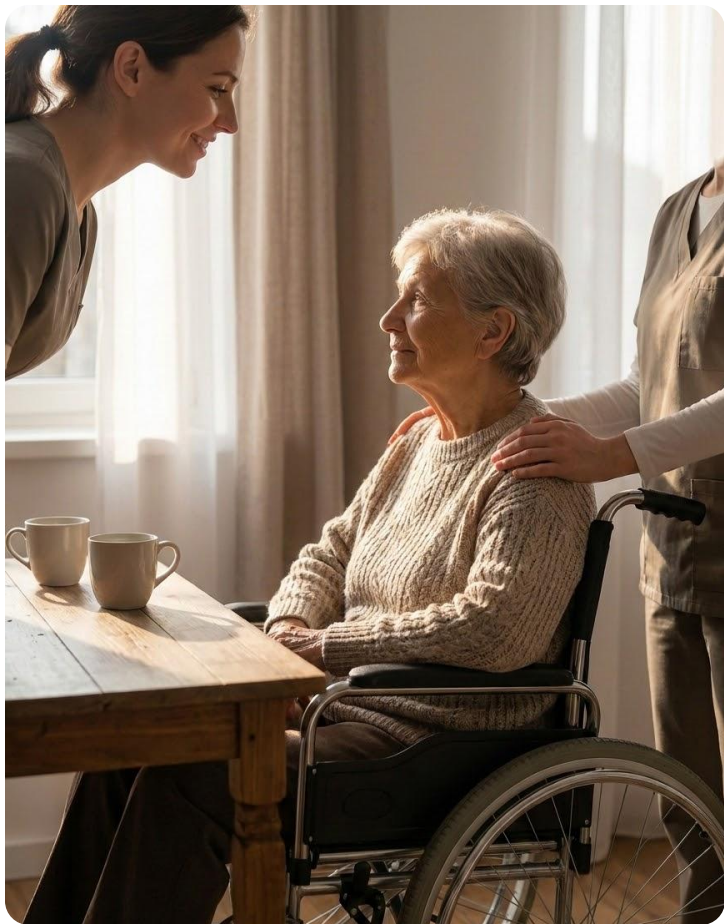
2 よい関わりの3つの秘訣

① わかってくれる人がいること

人は「わかってもらえる」と感じたときに安心する

- **受容**：否定せず、相手の話しを受け止める
- **傾聴**：相手の言葉に耳を傾ける
- **反復**：「〇〇なんですね」と応答を返す
- **沈黙**：相手の言葉を待つ

苦しみそのものは変わらなくても、誰かが自分を理解しようとしてくれていることが支えになります。



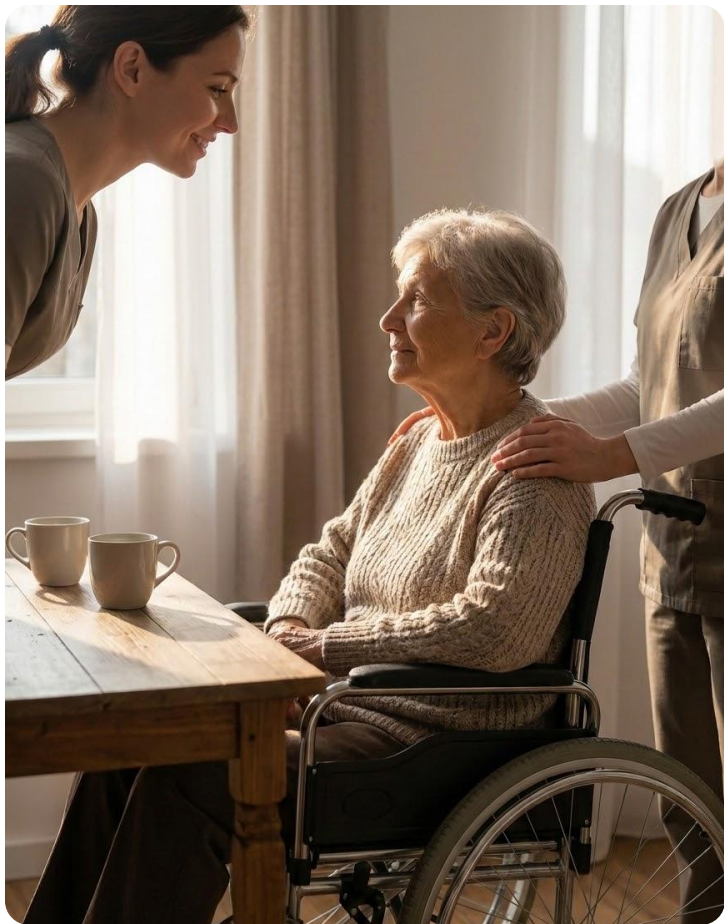
2 よい関わりの3つの秘訣

② 自由に選べる尊厳が守られること

一人の人間である「私」として扱われると力が湧く

- **意向の尊重**：これからの生活、場所、大切なこと
- **意思決定**：本人にとって嫌なこと、避けたいことの把握
- **価値観の探求**：過去の出来事から大切にしたいヒントを探す

聞いたうえで、できるだけその人らしさが守られる選択肢を一緒に見つけていくことが大切です。



2 よい関わりの3つの秘訣

③ 希望を持てること

最後だからこそ見いだせる「希望」が支えになる

- **人生の肯定**：これまで歩んできた道がよいものだったと満足できる希望
- **次世代への委ね**：未完了のものを託し、引き継いでくれる人がいるという希望
- **深い繋がりの実感**：最期の時期ならではの、親しい方々との心通う関わりの希望

一見、希望と思えないことも、人生を締めくくる時に大きな支えとなります。



ここまでのまとめ

老い、最期を迎える人と関わる＝本人の必要（支え）を満たすこと



支えてくれる人

わかってくれる人の存在



尊厳ある選択

自分の意思が守られること



最期までの希望

人生の肯定と次世代への委ね

これらは医療や介護だけでは満たしきれません。では、**教会ができること**は何でしょうか？

末期がん

Tさん(70代)





3 教会はどんな存在か

教会は何でないのか

教会は「部外者」としての役割があります

- **医療者ではない**：病気の治療はできない
- **介護者ではない**：具体的な生活支援はできない
- **家族ではない**：一番近くにずっといる存在ではない

一見、出る幕がないように思われるかもしれませんが、教会だからこそできる関わりがあります



3 教会はどんな存在か

教会は「ひと」である

距離感にあった関わりをすることができます

- **信仰**：聖書の教えが行動規範や精神的支えになる
- **仲間**：ともに生きる仲間との具体的・実地的な関わり
- **場所**：会堂や集まりが関わりを発生させる機会となる

教会という独自のコミュニティだからこそ提供できる、人間らしいケアの形があります

4 教会ができること

愛を形にするために、3つのアプローチで関わります



① 啓発（知ってもらう）

ケアマインドを提唱し、学びと体験共有の場を提供します。苦しみを和らげる術を地域と共に学びます。



② 実践（対話の質を高める）

受容と傾聴を意識し、寄り添う姿勢を大切にします。解決や意味付けを急がず、真実な関わりを実現します。



③ 育成（専門性を磨く）

素養のある人を見出し、スキルとフィードバックで宝として育てます。支える人を支える仕組みを作ります。





4-① 啓発（知ってもらう）

ケアマインドを提唱し、共に学び、体験を共有する場を提供します



仕える姿勢のケアマインド

イエス・キリストの模範（洗足）に倣い、正しさよりも「あわれみ」を大切にする姿勢を伝えます。最期を迎える方に仕える心を育みます。



学びの場の提供（セミナー・勉強会）

地域の方々を招いた「シニア勉強会」など、誰もがケアマインドを学べる機会を作ります。潜在的な関心の高さに応える場となります。



体験共有のプラットフォーム

過去の介護経験や今の課題を分かち合う場は、大きな支えになります。対話を通じて互いに学び、孤独を和らげる有効な手段です。

4-② 実践（対話の質を高める）

啓発に合わせ、日々の「会話の質」からケアを実践します



話を十分に聴けているか

- 自分ばかり話さず、沈黙を恐れずに相手を待つ
- 「そうなんです」という応答が返るまで深く聴く



教えありきの会話になっていないか

- 信仰的な導きを急がず、本人の本音を大切に
- 安易な結論で会話を終わらせない



寄り添う姿勢をもっているか

- 苦しみをそのまま受け止め、安易な意味付けを避ける
- 正解を出すことよりも、共にいることを選ぶ



4-③ 育成（専門性を磨く）

専門性を持ったケアをする人を、教会の「宝」として育てます



素養のある人を見出す

「やればできる」ではなく、根っからの素養がある人を見つけます。注意深く周囲を見渡し、適性のある人を宝として見出しましょう。



スキルの習得とフィードバック

学びを通じてスキルを磨き、フィードバックで自己への影響を理解します。形式に捉われず、人が生かされる自由な形を大切にします。



支える人を支える仕組み

人を支える人こそ、ねぎらいと支えが必要です。感謝を伝え、ケアのスペシャリストが孤立せず継続できる環境を整えます。



まとめ

人生の最期に真実な関わりを実現するために



必要な3つの支え

わかってくれる人、尊厳ある選択、最期までの希望。
この必要を満たすことがケアの本質です。



教会の役割：啓発、実践、育成

ケアマインドを伝え、会話の質を高め、
専門性を備えた「宝」となる人を育てます。

真実な関わりの実現

プログラム以前に、目の前の一人に寄り添う「愛を形にする」歩みをここから始めましょう。